

## 卒業論文の要旨

|                |   |
|----------------|---|
| 論文題目           | 東京ディズニーリゾートにおけるウェルビーイング創出戦略<br>ー4つの幸せホルモン「DOSE」循環モデルに基づく心理学的分析ー   |
| 氏名             | 木下 雅之   |
| メジャー           | 言語学・経済学   |
| マイナー           | 博物館学・多文化共生・地域デザイン・言語教育  |
| (要旨)           | <p>本論文は、東京ディズニー・リゾート(TDR)が生み出す高い満足感や継続的な支持の背景を、「ウェルビーイング」という視点から明らかにした。特に、ウェルビーイングを「ヘドニア」と「ユーダイモニア」の二層構造として整理し、それらが TDR の体験の中でどのように生み出されているのかを考察している。その結果、TDR での体験は、楽しい、嬉しいといった一時的な感情にとどまらず、達成感や没入感、「来て良かった」という意味づけを伴う、より深い幸福感へとつながっていることが明らかになった。長い待ち時間や、一部不便に思える空間設計も、実際には体験の価値を高め、心に残る感動を生み出す重要な役割を果たしているのである。</p> <p>また、本論文では、TDR の体験を支える仕組みを「DOSE」という枠組みを用いて整理している。これにより、これまで感覚的に語られることの多かった「感動」や「夢のような体験」を、人の心や身体への反応として説明できる可能性が示されている。</p> <p>さらに、キャストの行動によって生まれたゲストの感動が、キャスト自身のやりがいや喜びに繋がり、それが再びゲストへのサービスの質を高めるという好循環についても示した。このことから、TDR における幸福感は、企業側から一方的に与えられるものではなく、人と人との関わりの中で育まれているものであることを明らかにしている。</p> <p>以上の考察から、TDR の成功要因は、単なる娯楽性の高さやブランド力の強さだけでなく、「人がどのように幸せを感じるのか」という視点から、4 つの幸せホルモンを戦略的に循環させ、ゲストの脳内に高次元のウェルビーイングを創出しているからだ結論づけている。この視点は、テーマパークに限らず、体験を重視するさまざまなサービスにおいても応用可能であり、持続的な幸福感を生み出すサービスを考える上で、有用な示唆を与えることができると言える。本研究で示した考え方は、現時点において、「感動体験」を幸福感の構造として理解するための一つの手がかりになると言える。</p> <p>社会の複雑化とともに孤独やストレスが常態化する現代において、TDR が提供する「DOSE」の循環は、商業的成功を超え、人間のウェルビーイングを創出する一つの社会的システムとなっている。パークの退園ゲートを抜けた後に残る、静かで温かな幸福感は、幸福が消費された結果ではなく、循環が立ち上がった証拠である。ここにこそ、TDR が時代を超えて支持され続ける科学的な理由が存在するのである。</p> |
| (指導教員の推薦のコメント) | <p>本論文は、一見研究としては扱いにくいと思われる、テーマパークの楽しみ方について、「ホルモン」という観点から分析をされており、その点で非常に斬新的である。このテーマそのものを扱っ</p>   |

ている先行研究は少ないが、TDR とホルモンに関する先行研究に十分に目を通した上で、独自の結論を導き出している点で、異文化論・心理学・社会学などにまたがる優秀卒業論文と判断した。

山岡洋